

新刊紹介

■親鸞聖人筆跡之研究 辻 善之助著

辻博士が最近西本願寺及び高田専修寺に於て親鸞聖人の筆跡に關する調査を遂げられたことは、既に官報に掲載されたその報告によつて今尙耳目に新たなることである。本書はその調査を經緯として、昨年五月二十九日、東京史學會例會席上に於て講演された筆記に多少の修正を加へて出版せられたものであつて、近時に於ける最も注目すべき研究であることは、こゝに喋々するの要はないであらう。

本書の研究方法は卷頭に掲げられた圖版二十二葉を通過しても明かである如く、未だ嘗て公にされたことのない精緻なものであつて、筆跡の上に夫々脉絡を求め、一々證明し盡さずばやまない態度を示して居られるのである。冒頭先づ所謂親鸞抹殺論なるものを批評し、既にその立論の過去に葬り去られしことを説き、初めに本願寺にて見たる四點の筆跡をあげ、これを標準尺度として専修寺所藏の筆跡に及ぼし、その標準に合するもの三十五點の目錄を掲げ、仔細にその關係脉絡を説いて居られる。かくして坂東報恩寺の教行信證、二尊院の法然上人七箇條起請文の僧祿空の署

名及び近頃知られたる筆跡などに論及し、その何れも眞蹟なることを述べ、最後に將來の希望として、教行信證三本の比較研究ならびに化身土卷最後の所謂後序が聖人傳に影響する點を擧げて居られるのである。吾人は本書の出版によつて、聖人研究上格段の進歩を促すものと信じ、著者の功績は永久に没すべからざるものと思ふ。然し吾人はこの研究を全然肯定し去る事は出来ぬのであつて、なほ今後の研究に待つべき點もあると思ふのである。著者が覺信尼と高田の覺信とを混同して居られるが如き事は、千慮の一失に過ぎぬのであるが、吾人は著者が筆跡證明の方法として、一致點を拾摘するに稍急にして、その反面に於て相異點を看過されて居りはしないかといふことを潜かに憂ふるのである。幸ひにして絶待に相異點がなければ、結構であるが、若し然らずとすれば、證明の方法として開ける處がありはしまいかと思ふのである。これ吾人の杞憂に過ぎぬかも知れぬが、些か所懐をこゝに記して置きたい。菊判布裝八二頁、價金二、〇〇、東京金港堂發行（正）

■福井縣史 第一編第一冊 福井縣編纂

地方史の研究が歴史及び地理研究上重要な位置を占めて居ることは改めて説くまでもない。而してその編纂は至難の事業であつて、經濟的保證が如何に豊富であつても、編纂當事者自身に熱

心なる不斷の踏査と鋭敏なる史的識見を缺くに於ては、雜駁なる古文書古記録の輯録に終り甚だ不統一な體裁に終らねばならぬであらう。近來地方史の出版は續々として行はれて居るが、それらの中に於て本福井縣史が稀に見る出色のものたることは一度繰くもの、誰しも直ちに認めねばならぬことであらう。本書は第一編第一冊でその叙述藩政時代以前に屬し、續いて藩政時代縣治時代及び附圖が刊行される豫定である。吾人はこゝに一般的見地よりも寧ろ佛教研究に立脚して本書を紹介したいのである。その故は福井縣はご多様に佛教の各宗派各流派の入り込んでゐる地方は、餘り他に見ぬからで、吾人は特にこの點からいつても、本書に多大の興味を屬さねばならぬのである。試みに一讀の結果、佛教に關する項目を摘記すれば、東大寺田の設定、發達及びその所在、道守村田圖と寺田位置の推定、國分寺、廢寺遺址、泰澄と緣故の寺院、本地垂迹説と神宮寺(以上律令時代)、第三章第六節の新興佛教、越前の安國寺、若龍の安國寺利生塔(以上莊園時代)、朝倉氏の神佛崇敬及び社寺に對する法度、武田氏の社寺に對する法度及び頼母子興行、第四章第三節の眞宗の興隆と一揆の亂(以上戰國時代)等實に各時代に互つて、その色彩の變化しゆく有様を觀取することが出来る。吾人は本書の出版によつてわが佛教史ならびに佛教地理研究上寄與するところ甚だ大なることを感謝し、編

纂者の苦勞を偲ぶと共に、あはせて次編の續刊の速かならんことを衷心期待してやまぬのである。附録として天平神護二年越前國司解以下五篇の添附せられてゐるのも又よろこばしい。三十五葉の挿入圖版も記述と相俟つて居ながらして時代と土地に親しむことが出来る。菊判布裝八七五頁・價金六五〇・福井縣發行(正)

■華嚴學綱要 齋藤唯信著

一部五編より成る。その第一編華嚴の略史には、華嚴學の三國に流行せる事實を叙して斯學の主なる研究者を擧げ、次に第二編華嚴の本經には、特に『大方廣佛華嚴經』の部類教主・說時處・三昧說相について説明してある。而して第三編華嚴の教判、第四編華嚴の教理、第五編華嚴の實踐にありては、主として賢首の『五教章』三卷の所詮を中心として其他の章疏を參照せるものである。その教理において特に緣起性起を詳論し、實踐において觀行の方法に凝然明慧の説を紹介せられたること、以て用意のあるところを見るに足る。本書は元來、曾て東洋大學において華嚴を講じたることありしが、今その講案を基礎として之を訂正修補し「これを公にせるもの、特に啓發するところなしと雖も例の如く叙述平明にして意達せざるなし、華嚴宗の教理一般を一通り知らんとするもの、爲には、好き捷徑を與へられたものといふべきであらう。

菊判和装・二一八頁・價金二・五〇・東京丙午出版社發行(榮)

華嚴經要義 脇谷搗謙著

釋尊の自内證を開顯せる『大方廣佛華嚴經』は、實にこれ大乘經典中の精華である。その雄大にして典麗なる文字は、滔々として極まることなく、重復に似て重復ならず、新たな局面を開いては愈々本源に溯らしむる。そして遂に六十卷乃至八十卷の經典をなして、猶ほ足らざるの概がある。されば云何にして斯の經典の旨趣を失はずして、しかもその梗概を現はさんかといふことが古來學者の考に上つたことは少くはなかつたらしい。『華嚴經骨目』『要略華嚴經』等はこの要求に依りて作られたものと見ることが出来る、併しそれはまだ充分のものといふことは出来ぬ。而して本著も亦正しくこの要求に依りて作られたるもの、即ち八十卷の經に依りその一品々々の梗概を叙し、時に品中の要義を出して以て略ぼ經の内容の云何なるものなるかを現はさんと勉めたるもの、誠に簡にして要を得たるものといふべきである。されど單なる筋書に終らざる爲には、更に一般の經に對する親しみと之を現す工夫を要するようと思はるゝ。この點に於いて吾人は著者と共に『華嚴經物語』の出現を望まざるを得ない。

尙ほ附録として蓮華藏世界、賢首大師の空論、復禮法師の眞妄

頌、靈知不昧、靈辨及靈祐の華嚴經疏、日本唯識家の眞如觀、高麗の佛教等の十四篇の論文あり。これらの論文は特に著者の學殖の廣さを示し、それが却てまた本論とは別な意味で學者を資益するものである。菊版布装・三九六頁・價金參圓・京都興教書院發行(榮)